

# 平成31年度・令和元年度 附属小学校・附属中学校「教育相談室」活動報告

山西 健斗\*, 竹口 佳昭\*\*

(キーワード: 附属小学校・附属中学校, 教育相談室, スクールカウンセラー実習, スクールカウンセラーだより)

## 1. はじめに

鳴門教育大学(以下, 本学)の附属学校園では, 附属小学校・附属中学校を中心として「教育相談室」が運営されている。

平成13年度から, 附属学校園には本学の臨床心理士の資格をもつ教員がスクールカウンセラーとして配置された。また平成27年度からは生徒指導支援センターの設置に伴い, 生徒指導支援センター研究員の第2著者が附属小学校・附属中学校の専属のスクールカウンセラーとして配置されている。

本報告では, 平成27年度・平成28年度・平成29年度・平成30年の報告と同様に, 平成31年度・令和元年度の「教育相談室」活動について, 附属小学校・附属中学校におけるスクールカウンセラーの活動, スクールカウンセラー実習, スクールカウンセラーだより, 学年全員面接の4つの観点から報告する。

## 2. 平成31年度・令和元年度のスクールカウンセラーの活動

### (1) 活動形態

第2著者が附属小学校に毎週金曜日の10時から17時までの6時間, 附属中学校に毎週水曜日の10時から17時までの6時間, スクールカウンセラーとして教育相談活動に携わった。

スクールカウンセラーの活動は, 附属小学校・附属中学校とも教育相談室で行った。

### (2) 活動回数, 相談人数, 相談件数, 相談内容

活動回数は, 附属小学校は43回, 附属中学校は41回であった。

スクールカウンセラーの相談人数, 相談回数は表1・表2の通りである。

表1 平成31年度・令和元年度の附属小学校の相談人数・相談回数

面接の対象	相談人数	相談回数
児童	17名	30回
保護者	11名	46回
教職員	18名	110回
計	46名	186回

表2 平成31年度・令和元年度の附属中学校の相談人数・相談回数

面接の対象	相談人数	相談回数
生徒	11名	61回
保護者	10名	64回
教職員	16名	50回
計	37名	175回

\*鳴門教育大学生徒指導支援センター

\*\*高知県スクールカウンセラー

#### 1) 附属小学校での相談について

附属小学校の相談人数は全体で46名であった。内訳は児童が17名、保護者が11名、教職員が18名であった。昼休みや放課後に自由来室した児童は180人で延べ607人であった。

相談回数は、延べ186回であった。このうち児童が30回、保護者が46回、教職員が110回であった。なお、養護教諭とは毎回打ち合わせを行っているので、このデータには含まれていない(表1)。

児童の相談件数は17件で、相談内容は友人関係についての相談が11件と最も多く、いじめ及び家族についての相談が各2件で、自分自身・不審者についての相談が各1件であった。

保護者からの相談は11件で、相談内容は子育てについての相談が5件と最も多く、いじめ、親子関係及び発達についての相談が各2件であった。

教職員からの相談件数は18件で、相談内容は児童についての相談が12件と最も多く、学級経営についての相談が3件で、いじめについての相談が2件、不登校についての相談が1件であった。

#### 2) 附属中学校での相談について

附属中学校の相談人数は、全体で37名であった。内訳は生徒が11名、保護者が10名、教職員16名であった。

相談回数は、延べ175回であった。この中で生徒は61回、保護者が64回、教職員が50回であった。なお、養護教諭は毎回打ち合わせを附属小学校同様行っているため、このデータには含まれていない(表2)。

生徒の相談件数は11件で、相談内容は友人関係についての相談が8件と最も多く、いじめ、不登校及び家族についての相談が各1件であった。

保護者の相談件数は10件で、相談内容は子育てについての相談が8件と最も多く、不登校についての相談が2件であった。

教職員からの相談件数は16件で、相談内容は生徒についての相談が12件と最も多く、いじめ、不登校についての相談が各2件であった。

#### (3) 活動内容

附属小学校は、児童・保護者との個別面接、教員へのコンサルテーション、昼休みや放課後の児童とのプレイ、授業中の行動観察、個別学習支援、給食時間の昼食参加、6年生との全員面接を行った。

附属中学校は、生徒・保護者との個別面談、教員へのコンサルテーション、1年生との全員面接を行った。

### 3. スクールカウンセラー実習

本学臨床心理士養成コースの実習の一つとして、スクールカウンセラー実習がある。平成27年度から附属学校園でもスクールカウンセラー実習の受け入れを開始した。3年目までは、附属小学校・附属中学校とも各2名の実習を行った。4年目の平成30年度は、附属中学校で4名、附属小学校で3名が実習を行った。5年目の平成31年度・令和元年度は、平成30年度と同様に、附属中学校で4名、附属小学校で3名が実習を行った。

附属小学校の3名は、前期(4月～9月)に1名と後期(10月～2月)に2名が実習を行った。スクールカウンセラーの面接に陪席をして記録をとり、内容について検討した。昼休みや放課後には児童とゲーム等を一緒に楽しみ、児童とのこころの交流の回り方を学んだ。授業参観を行い、相談室での児童の様子と教室での様子の違いを観察した。6年生の全員面接も行った。

附属中学校の4名は、前期(4月～9月)と後期(10月～2月)に2名ずつ実習を行った。附属中学校でもスクールカウンセラーの面接に陪席をして交互にケース記録をとった。教育相談室に来室した様々な問題を抱えた生徒とウノやオセロ等のボードゲームや箱庭を楽しみ、また時にはその生徒の内面に迫るような話をしながら、こころの交流の回り方を学んだ。家庭訪問にも同行し、不登校生徒や保護者との関わり方を学んだ。1年生の全員面接も行った。

どちらの学校の実習生も、空き時間には、教員の職務内容やスクールカウンセラーとしての心構え、面接の振り返り等を行った。毎回、実習ノートにケース記録や実習の感想を記入し、第2著者がコメントした。

ある実習生の実習ノートには、次のような感想があった。「スクールカウンセラーとは光であり、影であることがわかった。生徒や保護者に対しての光であると同時に、目立たないような影の存在であるということである。筆者(実習生)は、この実習を通して、スクールカウンセラーの楽しさ、喜び、難しさ等様々な経験をさせてい

ただいたと感じている。」この感想から、実習生にとって直接学校の文化に触れたことは、今後スクールカウンセラーとして実践していくうえで大きな糧となったと考える。

#### 4. スクールカウンセラーだより

スクールカウンセラーだよりの『こころこころ』(巻末資料1)を毎月1回、8月を除き計11回発行し、児童・生徒に配布した。これはスクールカウンセラーの活動や勤務日を児童生徒や保護者に周知し、児童期・思春期のこころや他人との関係性等を紹介し、スクールカウンセラーに興味・関心を持ってもらうことを目的とした。

#### 5. 学年全員面接

全員面接の目的は、児童生徒が相談室やスクールカウンセラーの存在を身近に感じてもらうためと、その時に困っている悩みについて一緒に考えることである。

全員面接を附属小学校6年生・附属中学校1年生に実施した。附属小学校では、昼休みから掃除の時間にかけて4人の面接を10分ずつ行った。附属中学校では、昼休みに2人、放課後15人の面接を10分ずつ行った。

面接は実習生も含めて行った。基本的に児童生徒は自由に語り、それをスクールカウンセラーと実習生は聴いた。終了後のアンケートでは、面接を受けてよかったという児童生徒がほとんどであった。

チーム学校として、児童生徒から出された問題の早期解決に向けて、担任の先生や学年の先生と情報交換を行った。

#### 6. 成果と今後の課題

上記の活動を通して感じた平成31年度・令和元年度のスクールカウンセラー活動の成果と課題について述べる。

##### (1) 成果

附属小学校では、教室に確固たる居場所がない児童が心の休息を求める場所として、休み時間に教育相談室を開放した。教育相談室で休み時間を過ごした児童は、教育相談室から出ていく時には顔が明るくなり教室に戻っていった。わずかな時間が次時の授業のエネルギー源になったと考える。

いじめの相談をチーム学校として取り組んだ。解決方法はグループサポート・アプローチを用いた。グループサポート・アプローチは犯人捜しをせず、加害児童数名と被害児童が信頼している児童数名が、被害児童を支援するためにそれぞれ自分ができることを実行し、実行した結果を教頭先生やスクールカウンセラーに報告する。その過程や結果を教頭先生やスクールカウンセラーが称賛する。被害児童は、加害児童に守られることで安心した。加害児童は自分の行為を認められることで良い方向の意欲が増した。被害児童は登校するのが楽しくなったと語っていた。

全員面接を行ったことで、児童生徒一人ひとりがスクールカウンセラーの存在を認知した。そこから相談にもつながった。

##### (2) 今後の課題

成果の項目で述べたように、附属小学校では教室に確固たる居場所がない児童が心の休息を求める場所として、休み時間に教育相談室を開放した。半田(2000)は休み時間などに子どもたちに自由に相談室に来てもらい、自由に過ごしてもらうスクールカウンセリングの活動を自由来室活動と呼び、利用の容易さ等のメリットからその有効性を報告している。そうしたことを踏まえ、2限目と3限目間の20分休憩や昼休みで自由来室活動を実施していたが、多いときには20人近くの児童が相談室に来室し、スクールカウンセラーと実習生数名では対応することが難しい状況が生じてしまった。それだけ潜在的なニーズを抱えている児童が多い可能性も考えられるが、スクールカウンセラーが直接対応できないこともあり、児童へのフォローアップが不足してしまっている可能性もある。また新型コロナウイルスの流行に伴い、相談室内に児童が密集してしまうような現在の状況は来年度継続が難しいかもしれない。そのため相談室利用のガイドラインの作成といった対策を学校側と相談したうえで作成し、周知する必要があるかもしれない。

また附属小学校、附属中学校の児童生徒の特徴として、学習面に力を入れている児童生徒が多く、一週間のう

ちの大半を複数の塾を掛け持ちして通っているような児童生徒も少なくない。それらの児童生徒の中で、自発的に学習を楽しめている子どももいれば、保護者からの期待や進学先への不安から学習自体が苦手であってもそのような生活を続けている子どももいる。文部科学省（2016）の「不登校児童生徒への支援に関する最終報告」では、児童生徒の不登校のきっかけとして、学校に係る状況の中で、学業の不振が小学校では7.1%、中学校では9.3%といじめを除く友人関係をめぐる問題に次ぐ要因として挙げられている。そのため児童生徒の心理面はもちろんのことではあるが、学習面についても注目する必要があると考えられる。またカウンセリングや自由来室活動を通して、スケジュールの過密さにストレスを感じていても、ストレスに対してどのように対処すればよいかわからないという児童生徒も多くいる。そのためストレスへの対処法や援助要請の方法について授業などを通して予防教育が必要だと考えられる。また小高（2018）が報告しているようにスクールカウンセラーだよりを通した啓発的な活動も積極的に行っていく必要があるだろう。

## 引用文献

- 半田一郎 学校における開かれたグループによる援助—自由来室活動による子どもへの直接的援助— カウンセリング研究 33（3）2000 pp. 265-275.
- 小高佐由里 児童生徒の問題行動に対するスクールカウンセラーの予防的取り組み：現状と実現への課題 法政大学大学院紀要81 2018 pp. 29-35.
- 文部科学省「不登校児童生徒への支援に関する最終報告」2016 [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/08/01/1374856\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/08/01/1374856_2.pdf)



# こころころころ

2019, 9, 4 (水)

附属中学校 スクールカウンセラー通信

竹口 佳昭

## 友だちは一番！

今年の夏も、九州北部は大きな自然災害に見舞われました。何十年に一度といわれる集中豪雨。短時間に膝まで浸水してしまうほどの大雨でした。ここ数年、毎年のように同じ言葉を耳にします。自然の脅威に対して、私たち人間は本当に無力です。

9月は、台風の発生数が多い月でもあります。日本に（どの国にも）大きな被害をもたらさないことを願うばかりです。

さて、夏休みが終わり、2学期が始まりました。学期の最初は、誰しも頑張ろうとか、新しいことに挑戦しようとか、1学期うまくいかなかったことにリベンジしてみようとか、力が湧く時でもあります。それは、今までの嫌な思いとか、つらい思いを忘れて頑張ることができるからです。

人間は、誰しも心の中に小さな傷をいくつも持っています。でも、ほとんどの人は、無数にあるつらい記憶を忘れてしまうことができます。「忘れる」ということは、人間に与えられた素晴らしい恩恵ともいえます。

ただ、「忘れた」からといって、「記憶が消えた」わけではありません。忘れることと、それを体験しなかったことでは、意味がまったく違うのです。『モモ』の作者で知られるドイツの作家ミヒヤエル・エンデは、次のように言っています。「人は一生けん命勉強しても、その多くは忘れてしまう。しかし、勉強しなかったことと、それを忘れてしまうことは、全く違うことなのだ」と。それは皆さんもなんとなくわかるでしょう。



同じように、つらい経験を「しなかった」ことと、つらい経験を『忘れる』ことも似て非なるもののなのです。人間は健康的に生きていけるよう、つらい記憶を「無意識」の奥に押し込めているのです。でも、消えたわけではありません。だから、何かの体験があまりにもつらく苦しい場合には、うまく忘れることができず、折に触れて思い出して苦しむことになります。

子どもが「心に負った傷」を忘れるためには、友だちと楽しく遊ぶことが一番です。学校で一緒に遊ぶ友達がいれば、少しずつつらい記憶を忘れることができると思います。運動場で一緒にサッカーをしたり、教室で楽しいことを話しておなかの底から笑ったりすることができる友だち。そういう「楽しさを共有する友だち」との関わりが心を癒してくれます。

学校だけでなく、家に友だちをよんで一緒に遊ぶことはいいことです。お父さんやお母さんも一緒に遊ぶのもいいと思います。その時は「つきあってあげる」というより、「一緒に心から楽しんで遊ぶこと」がとても大切です。トランプでもウノでも人生ゲームでも、親が心から楽しめるといいですね。

その中から、心の太いつながりが生まれるかもしれません。

### 9月来校予定

4日(水) ・ 11日(水) ・ 18日(水) ・ 25日(水)

10:00～17:00

# **2019 Fuzoku Elementary School and Fuzoku Middle School “Educational Counseling Office” Activity Report**

YAMANISHI Kento\* and TAKEGUCHI Yoshiaki\*\*

School counselor activities have been carried out at Fuzoku Elementary School and Fuzoku Middle School Attached to Naruto University of Education since AY 2001. From AY 2015, school counselors have been dispatched from the Center for School Support of Guidance and Counseling. This report covers activity content, number of counseling cases, and other aspects of AY 2019 activities and considers future challenges regarding the work of the “Educational Counseling Office” that primarily serves the elementary and middle schools.

---

\*Center for School Support of Guidance and Counseling, Naruto University of Education

\*\*Kochi Prefectural School Counselor